

## 鳥飼地域 伊勢音頭

### 【はじめに】

摂津市内において現存する民俗芸能としては、江州音頭以外に伊勢音頭があることが判明したため、伊勢音頭の存在がどの程度認識されていたのかを知るために市による刊行物内での記載について確認した。

- ・ふるさと摂津 神社・仏閣編（平成7年3月）の「5. 藤森神社」の項目において、「6. 行事」の部分で「途中は鉦・太鼓・伊勢音頭でにぎにぎしく練り歩き、村ごとに競いつつ前後して境内に担ぎ込む。」との記載が見られた。

摂津市域の昔の暮らし（平成10年3月）p17において、市の聞き取り調査として地域での現存状況が確認されている。

（一部抜粋）

- ・祭の道中（宮入やおねり）の時、伊勢音頭を歌う。（藤森神社の秋大祭及び宵宮）
- ・棟上げの時にも歌う。
- ・昔は、結婚式でも誰かが歌うことになっていた。

「大正天皇のご大典（タイテン、即位式）のときは、青年団がオナゴの長襦袢（ジュバン）を着て、伊勢音頭を歌いながら踊って歩きましたんや。役持ちやお金持ちの家に行くと、この家は歓待しました。家の中でも踊り続けるから、床が落ちた家もありました。阿波踊りみたいな踊りですわ。」《鳥飼上》

「このごろは正調（正しい節と歌詞）を歌える人が少なくなりました。ただし、正調というても所によってちょっとずつ違いますんや。」《鳥飼下》

上記の内容は平成8年から平成9年にかけて、子供時代から摂津市域で暮らしてこられた60歳代から80歳代の方々に昔の暮らしの様子を中心に聞き取りした内容である。

過去の聞き取り調査において、歌を歌う場面は、藤森神社の秋大祭及び宵宮（10月17日・18日）や棟上げ式・結婚式となっていることがわかっているが、どのような歌が歌われているのかまで調査されていなかったため、現在歌われている歌詞を中心に調査した。

現在、当市内で歌われている歌詞がわかったのは、鳥飼下地域のみとなっている。

近年までは、酒席の伴う場で歌われる関係か、内容に卑猥な隠語が入っており、子供に歌わせるのが好ましくなかったため、農業協同組合成立以前より存在する地縁団体である、鳥飼下実行委員会によって歌詞の修正が行われていること。

また、祭の前になると、後継者の育成のため、地元の子供たちを対象に歌の練習を行っていることがあった。



サアヨーイセー  
アラヨーイセー  
ここの 座敷は  
アーヨイヤセートコセー  
目出度い 座敷  
アーヨイヤセートコセー  
<sup>アア</sup>中にさ 鶴亀ヨ  
トコセーヨイヤナ  
アレワイセーコレワイセー  
ソーラーヨーオーイイトセ

サアヨーイセー  
アラヨーイセー  
今日は 誰方どなたさんさんも  
アーヨイヤセートコセー  
ご苦労さんでござる  
アーヨイヤセートコセー  
<sup>アア</sup>こ苦労さついでにやヨ  
トコセーヨイヤナ  
アレワイセーコレワイセー  
ソーラーヨーオーイイトセ

サアヨーイセー  
アラヨーイセー  
嬉し 目出度のえや  
アーヨイヤセートコセー  
若松様よ  
アーヨイヤセートコセー  
<sup>アア</sup>床には 鶴亀ヨ  
トコセーヨイヤナ  
アレワイセーコレワイセー  
ソーラーヨーオーイイトセ

サアヨーイセー  
アラヨーイセー  
さした盃 わいな  
アーヨイヤセートコセー  
中見て 飲みやれ  
アーヨイヤセートコセー  
<sup>アア</sup>中にさ 鶴亀ヨ  
トコセーヨイヤナ  
アレワイセーコレワイセー  
ソーラーヨーオーイイトセ

サアヨーイセー  
アラヨーイセー  
伊勢は 津でもつ  
アーヨイヤセートコセー  
津は 伊勢でもつ  
アーヨイヤセートコセー  
<sup>アア</sup>尾張名古屋はヨ  
トコセーヨイヤナ  
アレワイセーコレワイセー  
ソーラーヨーオーイイトセ

サアヨーイセー  
アラヨーイセー  
伊勢に 七たび  
アーヨイヤセートコセー  
熊野に 三度  
アーヨイヤセートコセー  
<sup>アア</sup>愛右山にはヨ  
トコセーヨイヤナ  
アレワイセーコレワイセー  
ソーラーヨーオーイイトセ

サアヨーイセー

アラヨーイセー

親の 意見と

アーヨイヤセートコセー

茄子びの 花は

アーヨイセートコセー

<sup>アア</sup>千に 一つのヨ

トコセーヨイヤナ

アレワイセーコレワイセー

ソーラーヨーオーイトセ

サアヨーイセー

アラヨーイセー

いったら 見てこい

アーヨイヤセートコセー

名古屋の 城は

アーヨイセートコセー

<sup>アア</sup>金の シャチほこヨ

トコセーヨイヤナ

アレワイセーコレワイセー

ソーラーヨーオーイトセ

サアヨーイセー

アラヨーイセー

可愛 なりやこそ

アーヨイヤセートコセー

一つ力 たたく

アーヨイセートコセー

<sup>アア</sup>にくくて この手がヨ

トコセーヨイヤナ

アレワイセーコレワイセー

ソーラーヨーオーイトセ

サアヨーイセー

アラヨーイセー

お前 百まで

アーヨイヤセートコセー

わしや 九十九まで

アーヨイセートコセー

<sup>アア</sup>共に 白髪のヨ

トコセーヨイヤナ

アレワイセーコレワイセー

ソーラーヨーオーイトセ

サアヨーイセー

アラヨーイセー

奈良で 名所わいな

アーヨイヤセートコセー

猿沢の 池よ

アーヨイセートコセー

<sup>アア</sup>中にさ 鶴亀ヨ

トコセーヨイヤナ

アレワイセーコレワイセー

ソーラーヨーオーイトセ

サアヨーイセー

アラヨーイセー

清水港 わいな

アーヨイヤセートコセー

鬼より <sup>コレ</sup>こわい

アーヨイセートコセー

<sup>アア</sup>大政 小政がヨ

トコセーヨイヤナ

アレワイセーコレワイセー

ソーラーヨーオーイトセ

サアヨーイセー

アラヨーイセー

竹に雀 わいな

アーヨイヤセートコセー

品よく <sup>コレ</sup>とまる

アーヨイセートコセー

<sup>アア</sup>とめて <sup>アア</sup>とまらぬヨ

トコセーヨイヤナ

アレワイセーコレワイセー

ソーラーヨーオーイトセ

サアヨーイセー

アラヨーイセー

下へ下へと えよ

アーヨイヤセートコセー

川水は 流れる

アーヨイセートコセー

<sup>アア</sup>下でさ <sup>アア</sup>もんじりこヨ

トコセーヨイヤナ

アレワイセーコレワイセー

ソーラーヨーオーイトセ

サアヨーイセー

アラヨーイセー

富士の白雪 わいな

アーヨイヤセートコセー

朝日にや <sup>コレ</sup>とける

アーヨイセートコセー

<sup>アア</sup>とけて <sup>アア</sup>流れてヨ

トコセーヨイヤナ

アレワイセーコレワイセー

ソーラーヨーオーイトセ

サアヨーイセー

アラヨーイセー

いやと 云うのに

アーヨイヤセートコセー

無理から 入れて

アーヨイセートコセー

<sup>アア</sup>入れて <sup>アア</sup>泣かすはヨ

トコセーヨイヤナ

アレワイセーコレワイセー

ソーラーヨーオーイトセ

サアヨーイセー

アラヨーイセー

入れて おくれよ

アーヨイヤセートコセー

蚊がくて ならぬ

アーヨイセートコセー

<sup>アア</sup>わたし <sup>アア</sup>一人がヨ

トコセーヨイヤナ

アレワイセーコレワイセー

ソーラーヨーオーイトセ

サアヨーイセー

アラヨーイセー

入れて もらえば

アーヨイヤセートコセー

心地は よいが

アーヨイセートコセー

<sup>アア</sup>気がね <sup>アア</sup>しますはヨ

トコセーヨイヤナ

アレワイセーコレワイセー

ソーラーヨーオーイトセ

サアヨーイセー

アラヨーイセー

起きて 沖見りや

アーヨイヤセートコセー

沖に 白浪で

アーヨイセートコセー

<sup>アア</sup>可愛 殿ごをヨ

トコセーヨイヤナ

アレワイセーコレワイセー

ソーラーヨーオーイトセ

サアヨーイセー

アラヨーイセー

思うて 通えば

アーヨイヤセートコセー

五尺の 雪も

アーヨイセートコセー

<sup>アア</sup>えらい 雪じやとヨ

トコセーヨイヤナ

アレワイセーコレワイセー

ソーラーヨーオーイトセ

サアヨーイセー

アラヨーイセー

上と 下とに

アーヨイヤセートコセー

重なり おれど

アーヨイセートコセー

<sup>アア</sup>何が 不足でヨ

トコセーヨイヤナ

アレワイセーコレワイセー

ソーラーヨーオーイトセ

サアヨーイセー

アラヨーイセー

浅い 川じやと

アーヨイヤセートコセー

ひざまで まくり

アーヨイセートコセー

<sup>アア</sup>深く なる程ヨ

トコセーヨイヤナ

アレワイセーコレワイセー

ソーラーヨーオーイトセ

サアヨーイセー

アラヨーイセー

ちよいと つまんで

アーヨイヤセートコセー

広げて 入れて

アーヨイセートコセー

<sup>アア</sup>白い しるだすヨ

トコセーヨイヤナ

アレワイセーコレワイセー

ソーラーヨーオーイトセ

サアヨーイセー

アラヨーイセー

淀の 川瀬の

アーヨイヤセートコセー

あの 水車

アーヨイセートコセー

<sup>アア</sup>誰を 待つやらヨ

トコセーヨイヤナ

アレワイセーコレワイセー

ソーラーヨーオーイトセ

サアヨーイセー  
アラヨーイセー  
娘 十七・八  
アーヨイヤセートコセー  
渡場の 船よ  
アーヨイセートコセー

<sup>アア</sup>早く 乗らなきやヨ  
トコセーヨイヤナ  
アレワイセーコレワイセー  
ソーラーヨーオーイイトセ

サアヨーイセー  
アラヨーイセー  
おれと お前は  
アーヨイヤセートコセー  
松葉の ように  
アーヨイセートコセー

<sup>アア</sup>枯れて 落てもヨ  
トコセーヨイヤナ  
アレワイセーコレワイセー  
ソーラーヨーオーイイトセ

サアヨーイセー  
アラヨーイセー  
だいて 寝かせて  
アーヨイヤセートコセー  
手枕 させて  
アーヨイセートコセー

<sup>アア</sup>何が 不足でヨ  
トコセーヨイヤナ  
アレワイセーコレワイセー  
ソーラーヨーオーイイトセ

サアヨーイセー  
アラヨーイセー  
泣いて くれるな  
アーヨイヤセートコセー  
出船の時は  
アーヨイセートコセー

<sup>アア</sup>わしの 心がヨ  
トコセーヨイヤナ  
アレワイセーコレワイセー  
ソーラーヨーオーイイトセ

サアヨーイセー  
アラヨーイセー  
咲いて ボタンと  
アーヨイヤセートコセー  
言はれる よりも  
アーヨイセートコセー

<sup>アア</sup>散つて 桜とヨ  
トコセーヨイヤナ  
アレワイセーコレワイセー  
ソーラーヨーオーイイトセ

サアヨーイセー  
アラヨーイセー  
摂津 よいとこな  
アーヨイヤセートコセー  
住みよい ところ  
アーヨイセートコセー

<sup>アア</sup>益々 〴〵発展をヨ  
トコセーヨイヤナ  
アレワイセーコレワイセー  
ソーラーヨーオーイイトセ



サアヨーイセー

アラヨーイセー

これで 終りかいな

アーヨイヤセートコセー

おなごり 惜しや

アーヨイセートコセー

<sup>アア</sup>  
おなごり ついでにやヨ

トコセーヨイヤナ

アレワイセーコレワイセー

ソーラーヨーオーイトセ

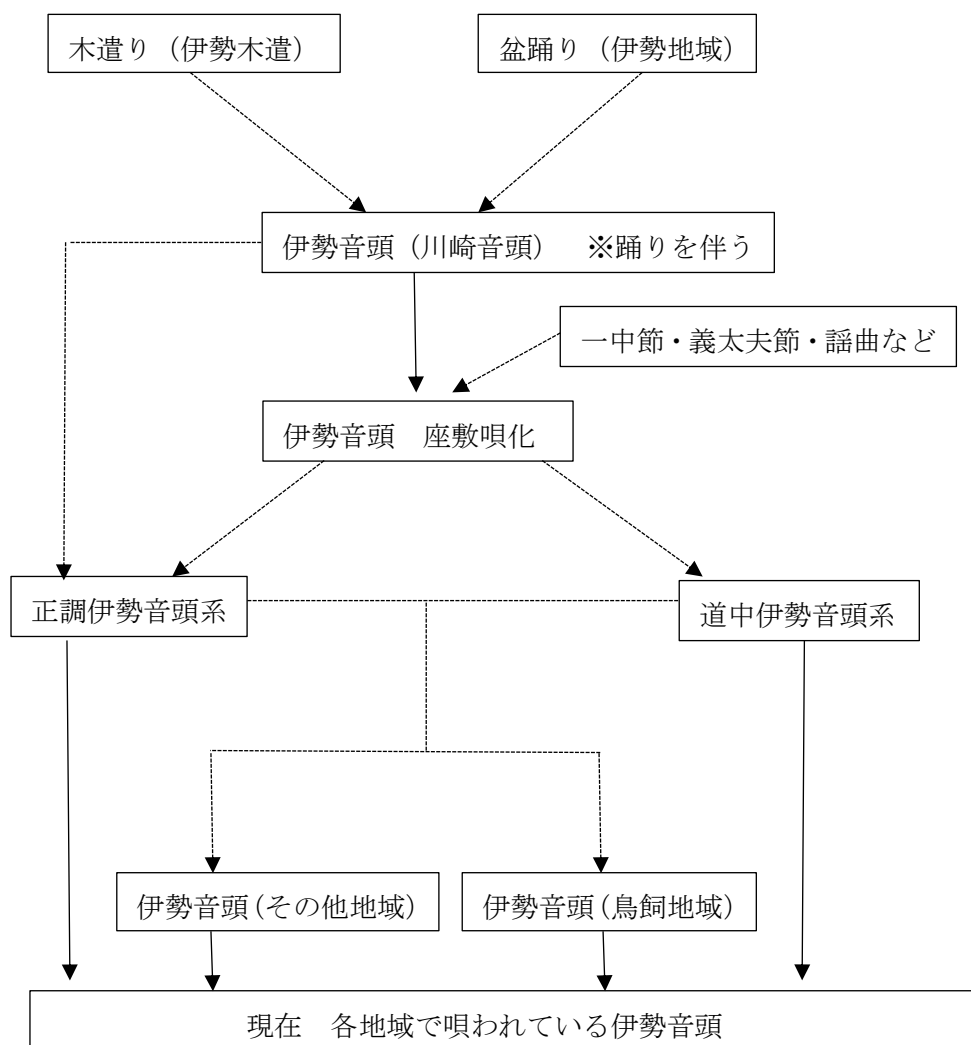
節や歌詞も元となった伊勢音頭とは異なるが、囃子や歌詞に伊勢音頭を元にしてしていると判断できる要素が残っている。

『伊勢参宮名所図会 四巻』(1797)の古市において「川崎音頭流行して是を伊勢音頭と称して…」と伊勢音頭の流行が書かれているが、滝沢馬琴の『羈旅漫録』(1885)には、「古市もいまは伊勢おんど大におとろへて、大坂或は江戸のめりやす、潮来ぶし、似て非なるものをうたふ。」とおよそ100年の間に伊勢音頭の歌詞や音頭が変わっており、踊りも踊らなくなっていることが記されている。

現在歌われているものは、大きく分けると、正調伊勢音頭系（正統な唄とされている）のものと、道中伊勢音頭系（伊勢参りへの道中を唄ったもの）に大分される。

先に述べた通り、江戸末期において既に変化していることが記されていることから、どのような派生が行われたのか、詳細が分かっていないこともある。

#### 系統図（概要）



正調伊勢音頭の歌いだしである「伊勢はナー津で持つ 津は伊勢で持つ 尾張名古屋は城で持つ」が分割されて歌詞として残っていることや、正調伊勢音頭の「コラコラヤートコーオオー セェノオーヨイヤナーアーララァ コレワイセーエ コノーヨイトコセー」という囃子が形を変えて残ったと思われる「アレワイセー コレワイセー ソーラーヨーオーイトセ」や道中伊勢音頭の出だしである「アーアー ヨオーイ ナアーア」や囃子である「アーヨーイセー ソーコセー」が出だしや囃子部分である「サアヨーイセー」や「アーヨイヤセートコセー」部分へ形を変えたものと思われる。

道中伊勢音頭の出だしである「アーアー ヨオーイ」が「サアヨーイ」と訛りつつ、歌を続けていくうちに、終盤の「コレワイセー」のイセ部分と結合したため「サアヨーイセー」と変化したものと考えられる。

囃子の部分である「アーヨイヤセートコセー」は道中伊勢音頭の囃子がほぼそのまま原型を残しているものと考えられる。

最後の囃子部分については、正調伊勢音頭の「アーララァ」の部分が、次の詞の「コレワイセー」に引っ張られる形で「アレワイセー」へと変化したものと考えられ、「コノーヨイトコセー」の部分も出だしが変化しつつ「ヨイトコセー」が「ヨーオイトセ」と名残が見える程度に変化したものと考えられる。

そのため、三つ目の歌詞が終わった後の囃子である「トコセーヨーイヤナ」は正調伊勢音頭の「アーララァ」の前の部分である「コラコラヤートコーオオー セェノオーヨイヤナー」の内「トコーオオー セェノオーヨイヤナー」が変化したものとして見れば、その変化がわかりやすい。

## 【おわりに】

伊勢音頭は江戸時代において伊勢の遊郭にて遊女が歌っていた歌が原型となっているが、当時通行の自由は制限されていたため、現在のように自由に移動が出来なかったが、伊勢参りのための移動は認められていたため、多くの人々が伊勢の地を訪れ、伊勢音頭を歌い覚え村々へ帰っていくことで、広く流行することとなった。

しかし、一大流行地であった古市での衰退や伝聞による伝播であったため、そのままの形で伝えられず、広がっていくうえで各地での変化が起こってきたことが見られており、鳥飼地域の伊勢音頭においても、上記の考察のような変化が長い年月の間に起こったものと考えられる。

参考文献 薮関月 編 1797『伊勢参宮名所図会 四巻』 p35

滝沢馬琴 1885『羈旅漫録 : 壬戌. 下』 p22 畏三堂